

「大腸癌の構造」

筑波大学教授 中 村 恭 一 著

愛知県がんセンター名誉総長

長 与 健 夫

この本は「大腸癌の構造」という地味な書名で、このタイトルを見ただけでは著者の言わんとするところがよくわからないが、そのページを繰ってゆくと、そこには画期的な内容が盛られていることが理解されてくる。

大腸癌のほとんどすべてはポリープ状の大腸腺腫を母地として発生するというのが今までのこの領域の常識であり、事実成書にもそのように書かれてあるものが圧倒的に多い。その常識を打ち破り単行本として初めて新説を世に問うたのがこの本であると言ってよいであろう。

有基性にせよ無基性にせよ、大多数の大腸ポリープが“腺腫”と診断される組織像を呈し、また大腸癌のほとんどすべてが胃癌で言う Borrmann 2 型と称せられる境界の明瞭な周堤を伴う陥凹病変から成り、その病変が腺腫形成性のはっきりした“高分化型腺管腺癌”の組織像を示すことは経験上誰もがよく知っている。そして大きなポリープ状の腺腫

病変には、その一部または過半数に癌化所見が見られることが少ないので、癌がポリープを占居するようになると、その表面が崩れてクレーター状の癌病変になるとの説に多くの人は多少割り切れないものを感じながらも、この間の事情をシェーマで示されると強い異論を唱えることをしなかった。いや十分に反論しうだけのものを持っていなかった、と言ったほうがよいであろう。

腺腫と腺癌—特に高分化型腺管腺癌—の組織像、細胞像の異同や多年の懸案となっている、いわゆる“境界領域病変”を、モルフォメトリーという客観的な指標を武器にして分析解明に当たってこられた中村教授は、数値をもってこれらの病変の性質を格付けすることができると、この数年来主張し続けてこられた。そしてこのような研究の結果から、“腺腫”と組織診断されたものの中にも悪性のものが含まれており、腺腫と腺癌との間にギャップがあることも強く感じられるようになり、従

来から言われてきた腺腫→腺癌説では、肉眼レベルでも組織レベルでも一夜にして変貌する“夜の破局”がなければ説明できないと考えられるようになった。

他方、手術切除された大腸癌症例の中には、大きな癌塊と共に早期胃癌の肉眼分類でいう小さな IIc+IIa 型の癌巣がたまたま共存することがあるのに注目し、このような副病巣を持つ大腸癌症例を精力的に集めて検査研究を進められた。胃の場合と違って X 線二重造影法でも内視鏡検査でもこのような病巣を術前に検出するのは大変難しいので、臨床の先生方との研究協力が是非必要であったであろう。そしてまた、このような臨床と病理の息の合った研究体制がなければ、この本は陽の目を見ることはなかったであろう。

この本には、X 線や内視鏡で容易に検出するアップルコアを示すような“進行性で大きな陥凹を示す大腸癌の大部分は IIc+IIa 型の早期癌病巣の進展したものである”ことを多くの見事なルーペ写真や顕微鏡写真を駆使して説明してあり、ただ単に大腸癌の組織発生を明らかにしただけでなく、大腸癌の集団検診・定期検診・早期発見には、いかなる注意と検査法が必要であるかを読者に暗示しており、一読・再読十分玩味するに値する書である。

B5 判 232 頁 定価 9,991 円 (税込)
送料 300 円 1989 年 医学書院 刊